

# プラクティス（実践と省察）

## 走ることの意味

この文章は、まだ世界をまっすぐにしか見られなかった頃の私が書いたものだ。

あの時の私は、走ることに人生のすべてを重ねていて、風を切る感覚の中に、自由と苦しみとを同時に感じながら、「なぜ走るのか」「なぜ生きるのか」という問いを、幼い哲学のように胸の奥で反芻していた。

いま読み返すと、あまりに不器用で、真面目すぎて、少し息苦しくもある。それでも、行間からは確かに、若さゆえのまっすぐな熱と、答えを求める切実な心の震えが立ちのぼってくる気がする。

年月を経たいま、当時の私はまだ知らなかったことを多く学んだ。しかし、どれほど経験を積んでも、人はときにあの頃の自分へと立ち返る。信じることの難しさや、歩みを止めなくなる夜の静けさを思い出すたびに。

この若き日の文章は、未熟でありながらも、私の原点を映し出す鏡のようなものである。どうかページをめくるあなたが、その鏡の向こうに、かつての私だけでなく、あなた自身の影をも見いだしてくれるなら、それ以上の喜びはない。

私はジョギングは冬に限ると思う。張り詰めた空気の中、風を切って川縁を走っていると、寒さで耳の感覚が無くなってきてちくちく痛んでくる。しかし十分も走ってくるころには体の中から暖まってきて、北西風も苦にならなくなる。そして走り終わった時の何にも変えがたい充実感、その瞬間を求めて今日もまた走る。

ところでスポーツというのはとても曖昧なものだともよく思う。広辞苑などで調べてみるとそれは「陸上競技・野球・テニス・水泳・ボートレースなどから、登山・狩猟などにいたるまで、遊戯・競争・肉体的鍛練の要素をふくむ運動の総称」だという。よくテレビで年収二億だ三億だなどと騒がれるプロ野球やJリーグのトッププレイヤーがいるが、彼らは別格としても、それなら定年後の余暇にと川縁をジョギングするおじいちゃんとか、公園で野球に興じる少年達も一様に「スポーツ・マン」ということになるのだろうか。

テレビのニュースなどでは、チェチェン内戦や政界再編などの国政問題と同列でスポーツが論じられている。そしてその一挙手一投足がまさに国民的な関心事であるかのように吹聴されるスタープレイヤーの華やかさの対局には、「スポーツ＝健康」ブームに乗せられてスポーツ機器を買い揃え、さらに肥満解消と称してジョギングを始めれば「運動後のビールが最高」とかいって、テレビで野球観戦をしながらいつい飲みすぎてしまう世のお父さんの姿がそれを象徴している。

このように一言で「スポーツ」といってもそれは決して一義的ではなく、その評価にしても多岐にわたる。シ

ヨウビジネス化されたプロスポーツは華やかではあれ、これこそが本当のスポーツなどとは決して言えるものではない。反対に「全世界の国民の健康維持」を理念としている、アマチュアスポーツの祭典Ⅱオリンピックがスポーツの代名詞かといえどそんなことも全くない。あまつさえプロアマどちらがスポーツとして妥当かという論議こそ水掛け論であり、退けられなければならないだろう。

それを踏まえつつ、本稿では、スポーツをつうじて社会の在り方を見つめなおしてみたいと思っている。とは言ってもここで私がスポーツを論じるということは当然にも「あるべきスポーツ像」を披瀝することではない。なぜなら私自身スポーツが好きで、そこから多くを学び、スポーツをつうじて自分の様々な至らなさ（もちろん体力にとどまらない）を知り、その克服を目指している過程的な存在に過ぎないのだから。

昔から私は学校のクラブなどで、先輩などからとにかく「スポ根」であることが美德だと思わされてきた。だから当然にもスポーツを喜びとか「生きる輝き」とか感じたことは一度としてなく、倫理的で「クソ真面目」とか言われ続けている。現在でもそうだ。スポーツに限らずなかなかそういった「傾向」を拭いきれない。しかしこの間すしだけわかったことがある。

それは以前ある同志から「おまえはマラソンの円谷（幸吉）みたいな奴だな。」といわれたことがあって、その時はあまりピンとこなくて気にも止めなかったのだが、最近ある本でたまたま自殺した彼の遺書を読む機会を得て、あまりに痛々しいその文体から、とても他人事とは思えない響きを感じたのだ。

「父上さま、母上さま、おすし美味しゅうございました。干し柿、モチも美味しゅうございました。∴（三十一人の肉親に対して呼びかけが延々と綴られている）父上様、母上様、幸吉はもうすっかり疲れ切ってしまっ  
て走れません。何卒お許しください。気が安まることもなく御苦勞、御心配をお掛け致し申し訳ございません。

幸吉は父母上様の側で暮らしとうございました。」（注1）

一九六四年東京オリンピックで銅メダルを獲得した円谷は、同じく選手で友人の君原健二に「もう一度メキシコで日の丸を揚げるのが国民に対する私の約束です」と言ったという。しかしメキシコオリンピックを控えてアキレス腱損傷など度重なる故障に苦しめられ、満足な練習もできず、彼はストイックに自分を追い詰めていったのだろう。そんな円谷の気持ちを私は痛いほど理解できる。しかし一方でそんなに自分を追い詰めてまで、なぜ勝ち負けにこだわらなければならないのかという疑問が残る。

かたや円谷と同世代を走り、いまなお現役で走りつづける君原の姿には、自分を追い詰める倫理観など微塵も感じられない。輝いているのだ。

近代オリンピックが発祥して今年で九十九年、来年で百年のメモリアルになる。古代オリンピックが貴族の賭け事に明け暮れるなかで滅んでいき、健全な「アマチュアリズム」の精神を掲げクーベルタン男爵によって復活されたのが一八九六年、ギリシャのアテネにおいて開催された第一回大会には、たまたま観光で訪れていた人に加えて参加を促したという。

しかしそのような開かれた祭典も、しかし現在に至っては、「オリンピックマナー」と呼ばれる莫大な資本が移動する、国家や企業の利益誘導の場へと変質してしまっている。

そしてそれにもなあって、競技にたいする選手の意識もより計算的なものに変化してきているのだ。だからといってそれを憂いて「原点にたちかえれ」などといってもそれは空語にしかないだろう。問題なのはこのように歪んだかたちでしか、スポーツを定立させえない現代社会の在り方なのであり、他人を競争の対象としてしか見いだせない社会の価値観にあるのだ。

ともあれ自他ともに認める「クソ真面目な」私自身の反省と自己飛躍をも念頭において、さっそく論を進めていきたい。

## 一、ドーピング問題から考える

アジアでの「スポーツの祭典」の興奮がさめやらない十一月二十八日、広島アジア大会で圧倒的な活躍をみせた中国代表選手十一人がドーピングテストで陽性反応を示したというショッキングな報道があった。

しかもその選手たちが使用していた薬物は一様に「テストステロン」という筋肉増強作用のあるホルモン剤であることが判明し、欧米などの諸国はこぞって、この「大量発覚は、中国のドーピングが組織的におこなわれた証拠である」と中国の体制批判を繰り返した。確かに私もこれだけ多くの違反者が出た以上、これは中国の組織「犯罪」ではないかと思う。しかし欧米諸国などがこぞって言うように、この「事件」ははたして独り中国だけの問題なのだろうか。

新聞報道によれば「テストステロン」という薬物は一般には更年期障害などの治療に使われる男性ホルモンであり、ソウル五輪でベン・ジョンソンが用いた「アナボリック・ステロイド」という動物から抽出するホルモン剤とは違って、もともと人間の体にある物質である為、検査・判定が極めて困難とされている。(注2) 今回の「発覚」も何人もの女性選手が通常より高い数値の反応を示したため発見されたものであり、潜在的な薬物服用選手はよもや中国だけに止まるものではないだろう。

最近になってこの薬剤を使って旧東ドイツの水泳選手が幾つもの国際大会に出場していたことが暴露されたが、アメリカの陸上四〇〇m障害の王者エドウィン・モーゼスが明らかにしたところでは、世界の一流選手の約半数は「ばれない方法で」何らかの薬物を使っているのだそうだ。

スポーツ界の薬物汚染はここまで進んでいるのかと思うばかりだが、ここで気になるのは、競技という一時的な効果を目的として行われるドーピングが、人体にとってどのような影響を及ぼすのかということだ。生死に係する事だけを挙げても、一八八六年のフランスの六〇〇m自転車レースに出場したイギリス人選手が、トリメチルという興奮剤を服用して死亡したのを筆頭に、一九六〇年にはデンマークの自転車競技選手が血管拡張剤を使用して同様に死亡している。また最近ではドイツの大衆紙ビルトが「旧ソ連の一流選手五十人が薬物使用のため早死にした」と報道し波紋を呼んだ。

一方で牛の睾丸から採取するホルモン剤「アナボリック・ステロイド」には精神面における強い副作用があり、記憶に新しいところでは、一昨年この薬剤を服用したボディービルダーが横浜中華街で女性を人質に籠城するなどということが起こっている。

こうして見てくると、世間で「一流」と呼ばれる選手に成れば成るほどIOC（国際オリンピック委員会）などで禁止している違反事項に抵触し続け、その結果規制が強まれば強まるほど巧妙に、そしてより人体に悪影響のある薬物を使用しつづける構造にはいつていく。このように「イタチごっこ」を繰り返し、自分の生命を危険にさらしてまで勝たなくてはならない競技とはいったい何なのかということが、ここで改めて問題にされなければならない。

アメリカのオリンピック、ハンマー投げ優勝者のコノリー選手は、ドーピングが発覚するまで八年間薬を服用し続け、その調査会の査問で「なにがなんでも強くなければ、激しい競争社会から脱落してしまう」と心情を吐露した。また最近のアンケート調査で「金メダルを確実にとれるが死ぬ可能性のある薬を使うか」という質問に、アメリカのオリンピック選手の半分以上は「イエス」と答えた。

ここで思い出されるのが、一九三六年のベルリンオリンピックで奇跡の優勝を遂げた、女子二〇〇m平泳ぎの

前畑秀子選手の事だ。有名な「前畑がんばれ！」の実況放送は、当時の戦争という日本の暗い状況下一条の光だったと言われるが、当の前畑選手にとっては少し勝手が違っていたのである。

このベルリン五輪は、当時台頭しつつあったナチスドイツが国威発揚のために最大限利用した大会で、ドイツ選手は勝つことが義務付けられていた。それは戦争にのめり込んでいった同盟国日本にとっても同じで、前畑が日本を出発する際に壮行会でかけられた言葉は「死んでも勝ってこい！」というものだった。

というのも前畑は、四年前のロサンゼルス五輪にも出場し、トップと〇・一秒遅れの二位という成績に終わった。そして帰国すると銀メダルをとった称賛どころか「なぜもう一息頑張らなかつたんだ」という声ばかりだったのである。満身創痍の十八歳の少女は来る日も来る日も練習を重ね四年後のベルリンに望んだ。

シベリア鉄道を経由してベルリンへ向かった日本選手団は、開会式で戦闘帽を被って行進したという。このとき前畑選手は「負けたら死んでお詫びしようと思っていた」と述懐しているが、まさに「必死」の覚悟で競技に望んだのではないかと思う。

この前畑選手と前述したコノリー選手の心情には、時代の相違もあるが明らかに差異を認めることができる。前畑選手の場合、封建的で家父長制的な「お国の為」に死ぬことを覚悟で、寝る間を惜しんで練習に励んだのであり、かたやコノリー選手は弱肉強食の競争社会のなかで常に他者の存在に恐怖し、結果としてドーピングに手を染めていったのだ。

しかしこのような違いを前提にしてもなお両者に共通していることがある。それはスポーツが、単なる勝ち負けの手段としてしか位置づけられていないということだ。

人間の可能性を引き出しその喜びを、選手相互が喜びたたえあうというスポーツの醍醐味はもはや理念ではないのか、そう考えると私もスポーツを愛好する一人として悲しくなる。このようにスポーツが手段化してい

く社会を何とか変えていきたい、そう思うのは私だけではなく、オリンピックという「魔物」に取りつかれドーピングに手を出さなければならなかった選手達の思いにも共通するはずだ。

## 二、正月の大学駅伝を見て思ったこと

毎年正月は、こたつに入ってミカンを食べながら、大学駅伝をみるのが小さい頃からの習慣になっている。今年の大会では区間新記録が幾つも更新され、往路では早稲田大学の逆転優勝、復路での中央大学の優勝は、山梨学院大学の「涙」の総合優勝のまえにかすんでしまったが、今年も様々なドラマがあってとても面白かった。しかし今回は若干視点を変えてこの駅伝を眺めてみることにした。

中でも驚いたのは箱根の踏切で、選手の通過の際に電車が止まっていることだ。都電なんかではよく信号待ちしている電車を見かけるのだが、駅伝のランナーが公共の電車より優先するということはあまり考えられない。一分一秒のタイムを競い合うこのレースにあつては、電車でさえもこれを遮ってはいけないというのだろうか。

そしてこれはいつも疑問に思うことだが、選手の真後ろにびったりとついていく伴走車である自衛隊のジープの存在だ。つまりランナーである選手は白バイの警察官に先導され、自衛隊に護衛されながらVIP並の待遇で走っている訳である。いくら交通規制のためとはいえってもおかしいのではないだろうか。

もとよりこの駅伝大会は「関東学生陸上競技連盟」という関東一円の学生の主催であり、学生自治の一環で



あるはずだ。この連盟に募る学生が道路確保をし、運営を担ってこそ駅伝を組織するということになるのではないのか。

しかしテレビで一大イベントとして放映され、沿道の観客を誘導することすべてを学生の力で運営していくのは現在においては不可能で、さまざまなスポンサーの資金によって警察や自衛隊が動員され、学生ランナーはさしずめ「お客様」としてただ「走らされている」のが実情なのではないだろうか。

それにしても目につくのが、ランナーのゼッケンについたビールのスポンサーのロゴである。二日間合わせて十時間も露出させているのだから相当の宣伝にはなるのだろう。さらにテレビを見れば十分に一回はそのスポンサーのコマーシャルが流れ、徹底しているなどに関心したりもするが、さしずめランナーは「動く広告塔」とでもいったところだろうか。

ここでも感じるのはスポーツがまさにイベントとして、スポンサーの意図やテレビ局の企画にそって作られているのではないかということだ。脱水症状になりながらヨロヨロと最後まで走るランナーをテレビは感動的に描きだす。しかしその走っている学生の思いとは別のところで作られるドラマになんて、少しも感動することはできない。

手作りでもいいから学生連盟が軸になってアスリートを組織し、大会を運営していく、この過程全体が学生駅伝なのであって、そういった当たり前のことすら期待できないのが今のスポーツ界の現状なのだ。

### 三、ランニンググラフを巡って

前章まではいわゆる「スポーツ観戦者」としての視点から、スポーツが手段化されている事について述べてきた。私もただ見ているだけなら「ああだこうだ」と対自化できるのだが、いざ自分のことになるとなかなかそうはいかない事もあるわけで、この章では「スポーツ実践者」として、主体的にどうか、現実にはわれわれのまわりで起こっている事、問題になった事などを切り口にして、さらに内容を深めていきたいと思う。

私の地区では一昨年から「ランニンググラフ」というものをつくっている。毎年三月に私の支部では組織的な取り組みとして「戸田マラソン」に参加しているのだが、イベントとして参加するというような位置はあるものの、ではなぜ戸田マラソンに出ようとしているのかということについて、それまでなかなか共通の確認が取れてこなかったのではないかと思う。何故かという点、例年マラソンの一〜二週間前になって初めて練習を開始し、マラソンが終われば、また以前の「怠惰」な生活に戻るということが繰り返されてきたからである。

そこですくなくとも「戸田マラソンがあるから走る」というのではなくて、恒常的に体力を付け、自分の体調にも配慮できる在り方を組織的に確認していこう、ということになり、わが地区でも討論してきた。その結果、目に見える形で個人の成果が分かり、他の同士に対しても「共に高まっていこう」と励まし合うことを前提にして、このグラフをつくることにしたのである。

なぜ励まし合うことが前提なのかというと、自分の走った距離を記載していくこのグラフにあっては、一つ間違えると、どこかの会社の営業成績みたいに他人との差異が優越であったり、劣等であったりということになって

しまうので、そういう関係には入りたくないということがその理由である。

しかし実際に行ってみると、案の定恐れていたことが起こった。各人の取り組み方によって跛行性が生まれてきたのである。そのうえにあらうことか私が「熱血セールスマン」になってしまったのである。

始めは、「みんなで走ろう」とか言っていた私が、グラフでちょっと皆より走っていることを理由にすっかり天狗になってしまって「なんで皆は走らないんだ」みたいなことを回りの同志に言うようになっていった。

中でも特に口やかましく言ってきたのは、私より活動歴の若い同志Hに対してであった。普段でも、彼のような日常の生活態度をみるにつけ「出来ていない」とかなりきついことを言ってきたように思うが、とかくこのグラフを巡っては、結構感情的になっていたと思う。

今思うと、当時の私は頑張ろうとしているHの成長を全く省みることなく、現象面での至らなさのみをあげつらねて「あれがない、これがない」などと批判していたのだ。その結果、彼の主体を変えることはおろか、組織としての同志的な関係をつくることさえできなくなっていたのである。

それはちょうど私自身が組織結集当初に「諸先輩」ならぬ同志から受けてきた指摘（それらがすべてが正しかったとは思わないが）を正當に捉え返すことなく、すべて「お説教」として受けとめ、いつも被害者として自分を作ってきたことの言わば裏返し表現であったのだと思う。そしてもっと遡れば私は学生時代、年功序列の運動部に所属してきたことにもその原因があるのかもしれない。

私は高校時代に陸上部に籍をおいていた。ここでの練習はとにかく走り込みの量によって決まるといっても過言ではなかったと思う。毎日毎日脱水症状になるまで走り込みをし、先輩の練習が終わるまで私たち後輩も練習をやり続けた。そのうえ練習が終わればグラウンドの整備や部室の掃除が待っていて、全て終えて帰りの身支度をするともう外は真っ暗だった。

何度となく辞めたいと思ひ先輩に直訴したのだが、そのたびに先輩は「それくらいの事で弱音を吐くな」とかいつて、さすがに暴力は振るわれなかったが、何度となく怒られた記憶がある。万事こんな調子だから、私のかに自然と先輩―後輩という上下関係が染みついてしまったのだろう。

しかしその後このような上下関係は、社会に出るとむしろ喜んで迎えられる傾向にあった。勤勉で上司の命令に従従することがいい社員という価値観として引き継がれていったのだ。だから私がブントに結集したときに回りの同志は私を「世界のプロレタリア」とか言つて揶揄したのだが、それは当時まぎれもなく即時的で「勤勉」なプロレタリアの地平に止まつてゐる私の在り様だったのである。

その後私は、八九事態の中で主体的な組織への関わりを決意していく訳だが、状況としては、東欧で次々と共産党が崩壊したり、三里塚でわれわれが同盟から追放されたり、警察公安からあらぬ容疑をかけられたりと、結集したての若い活動家にとってはそれはもう「展望の無い」時代と映つたのである。

しかし回りの同志達はやたらと気合がはいつていて「この第三の試練を乗り越える」ということを皆口々に言つてゐた。私も半信半疑ながら、意見を求められれば期待どうりに同じことを繰り返してゐたように思う。

つまり倫理的で「勤勉」な私は、己の置かれてゐる当時の非合理的な状況には疑念を持ちつつも、即時的には受動的な能期待者として自己を位置づけてゐたのだ。そして現在に至つてもそういった物の考え方は基本的に作り替えられることのないまま来てしまつており、そこが現在H同志と対等な関係を作れない原因になつてゐるのだと思う。今回このテーマを書くとしたきっかけも、そういった自分自身の陥穽を超えていきたいと思つたからなのだが、図らずもそれに気づいたのは、私がそれまで自己修練と研鑽の対象としてしか見てゐなかつた「スポーツの意味」といえるものに触れたからだつた。それが冒頭にも挙げた円谷幸吉のスポーツ観にたいする、単なるアンチテーゼではない君原健二のスポーツに対する姿勢である。

スポーツや、深読みすれば組織が、単なる手段ではなく目的となるような在り方を、私は単なる理念としてではなく、現実の問題として考えていきたいと思う。そのうえで君原の生き方はとても多くの事を指南してくれている。

#### 四、走るといふことの意味

先日テレビで久しぶりに君原健二の姿を見た。近代オリンピック発祥の地ギリシャのアテネで君原がマラソンを走るといふものだ。今年で五十四歳に成ろうというのに体は引き締まり、現役当時と比しても少しも見劣りしない彼を見てまず驚いた。そしてなにより一キロ五分のペースを崩さずに淡々と走り、四二・一九五キロを走りきってなお「走るといふことは楽しい」と言い放った、彼のきらきら光る目に私は引きつけられた。

君原は一九四一年生まれ、円谷が四〇年だから一歳違いの同学年である。福岡と福島の二人の高校三年生は揃ってインターハイに出場しているが、そのときは共に予選落ちしている。二年後の秋田国体で再度彼らは顔を合わせ、五千メートルに出場、このときは円谷が二位、君原が三位であった。

その後二人はそろってマラソンに転向、六四年四月のオリンピック選考会では君原が優勝、円谷が二位でそろってオリンピック選手となったのである。しかしオリンピックという大舞台、「日本の代表」という重圧のなかで押し潰されてしまったのは、円谷ではなくむしろ君原の方だった。結果は選考会での成績が嘘のような八位。そ

の後一年間は放心の日々だったという。

つまり当時の君原は、その後六八年メキシコオリンピックの前の前畑選手同様に「お国の為」という大義名分に踊らされていたのだといえる。しかし親友の円谷の死を経て、君原のなかで走るという行為の意味が次第に変化していったのである。

「それまで長い距離を走ることを面白かったことはなく、一種の使命感のようなもので走ったのですが、その頃、作品をつくる喜びというようなものを感じました。練習するグラウンドはアトリエ、本番の競技会が展覧会場、そこで自分の体をつかった作品を皆の前に差し出し、見てもらうのだ。そういう喜びを強く感じるようになった。」と当時を振り返って君原は述べている。

現在円谷の故郷である福島県須賀川市では、毎年秋に「円谷幸吉メモリアル・マラソン」という催しが行われていて、君原はここに毎年参加しているというのだが、走る事は芸術であり、それは喜びでもあるという君原の言葉の中には、自分同様にオリンピックの重圧のなかで喜びを見いだすことのできなかった円谷への、限りの慈しみが込められているように思う。

二年前位であったか、東京の市民マラソンに君原が「壮年の部」でエントリーしてその時のインタビューで「マラソンに年齢制限なんてないんだ。順位なんて気にしない。走れるうちが現役なのであって、わたしはそれを大事にしたい。」と言っていたのだが、ほんとうにこのおじさんはすごいなとつくづく思った。それと同時に改めて自分の存在の小ささを実感したのである。

高校時代、私はインターハイなどでいざ走ろうとするとタイムや順位のことだけしか考えず、汲々として前日はキリキリと胃が痛んだものである。そしてそれは現在にあっても「くしなればならない」というゾレンを自分や日同志に課すばかりで、なんら相互の内容的な結合を問題にできない私の組織観に引き継がれている。

しかし「走れるうちが現役」という君原の言葉に象徴されるように、われわれの（組織の）運動は外に向かって開かれているのであり、何か特定の真理を体現する「修験者」の集団として存在しているのではない以上、ちっぽけな自己保身や絶対的真理としての組織実念論などは、相互の働きかけ一つで必ず乗り越えることができるのである。

以前「スポーツを征するものは、すべてを征する」とある同志は言っていたが、すこしずつ私にもその意味が分かってきたように思う。相互討論を活性化させ、価値観を刷新し、組織創造性を育むということを決まっていざいごとやお題目で終わらせないような組織を作っていきたい。そしてそれが私のなかの円谷を超えていくことでもあるのだ。

## 終わりに

先日、生まれて始めてフルマラソンを走った。完走はしたものの、昔の悪い癖でタイムばかり気にして途中でペースを崩し、最後は腹痛までおこしてしまった。そんな私の横では歩くようなペースで、さも楽しそうに走っている老夫婦がいた。思わず、せせこましく走っている自分が恥ずかしくなってしまったのだが、君原が言っていた「喜びを感じる走り」というのは、きっと彼らのように健康でいつまでも走り続けられる在り方を言うのだろう。しかし私には私の「喜びを感じる走り」もあるのではないか、と自問自答しながら腹痛をこらえて走り抜い

たのである。

タイムをいかに縮めるのかだけが問題の人は、自分が走れば走るほど可能性が開かれていくことに無自覚である。私は長らくそのような思いに捕らわれてきた。今後もしばらくはその思いを引きずっていくことになるのかもしれない。しかしそれでもいいのだ！ わたしは今日も寒風の吹きすさぶ、いつものランニング道路を走りながら、昨日よりは前進している自分を確認していきたいと思っている。

注1ー円谷遺書について

円谷の遺書については資料によって若干の違いがあるが、現物から書きおこすと当該箇所は次のとおり。

父上様 母上様 三日とろゝ美味しう

ございました。干し柿 もちも美味しうござい  
ました。

(中略)

父上様 母上様 幸吉はもうすっかり  
疲れ切ってしまったて走れません

何卒 お許し下さい。

気が休まる事なく、御苦労、御心配をお  
掛け致し申し訳ありません。



幸吉は父母上様の側で暮らして過ごしました。

注2ー テストステロンとアナボリックステロイドについて

化学物質として考えた場合にはテストステロンもアナボリックステロイド（AAS）に含まれる。テストステロンはヒトが生得的に持つ天然AASである。またテストステロンにも人間を攻撃的にするなどの作用があることが知られている。なお、二〇二五年時点ではアナボリックステロイドは国内での市販は無いが、Amazonなどでも個人向け輸入品として合法的に販売されている。

